

# 憂鬱

添美

私の生の巡礼における  
憂鬱を消して下さい

ああ、全てが光を浴び、生の巡礼の全てを表面に出す。そこでは光に瑞々しい性質が、軽く穏やかに憩う。また、光に枯れる性質は、聖化されるをよろこぶ。だが、光に適切でない性質は、救われなくてはならない。

※ ※

神さま

適切でない性質は

救いを必要としています

神さま

ここにこそ

癒しをお願いします

※ ※

私の思いは、新しい地への参加です。

だが、私の聖化された性質は、  
新しい地に適切であろうか。  
仮に適切でないとするなら、

私は聖化による自然への復帰を望みます。

そして、私には聖化さえも与えられないなら、

「ただただの救い」を求めます。

それは濃い光が囲う地にて、

解かれることをもとめます。

※ ※

垂れるだけ

濃く垂れて

柳の枝末のように

揺らぐだけ

揺らぐ

天空の光径

※ ※

私の生の巡礼は、最後のときを迎える。複数枚の白衣を身に、穏やかに呼吸を整え、静かに息を抜く。萎えた生の容姿は、光の水脈で潤い、私は平素の巡礼姿を見せて歩きだす。

それは、この地を辿るのと同じようである。

ただ、柳が枝を垂らした辺りであろうか、いつの間にかこの地とは逆に歩いている。だが私の生の巡礼にとっては、しごく当然のように向きは変わっていない。

※ ※

それは白衣を撓らす光の力が消えるまでの巡礼であろうか。  
それは長い長いものではなく、幼い頃の村はずれまでの距離に似た、生の  
外れの径である。

生の巡礼を受けたお方との出会い。  
再会の状況であり、それはやわらかく、  
美しいものでしょう。

昔、生の巡礼を受けるときの納得が、  
こんどは受け入れて下される。  
母なるお方だから、  
そこに不安や、怯えはもうない。

※ ※

ここは生の巡礼の

終始

※

丁寧に撫ぜるチョウのように、  
咲く花のひとつ一つに声をかけて触れる。  
そのとき天使が、如来が……、  
どんな歌を歌われているだろうか。  
どんな調べに包まれているだろうか。  
領きはそこにある。

※ ※



領きにこそ

成果があり

神の樂園がある

もし…

一粒に憂える夏

※  
※

季節を侘びるように遅れて開いている、昨秋に植えて、未だ身長にも満たない木蓮が夏の盛りに咲いている。この木蓮はいい、支柱を頼りながらも「咲きました」といい、脹らみやつとの蓄みを見せてくれている。内面をいつも見せていることがよい。

咲けるときには

咲く

惜しまずに

咲く

だが、私の巡礼は、未だに開花しないでいる。私の巡礼で得た経験は貧弱なもので、やがて私の内面は最適な判断をするだろうか。私の巡礼は何も具体的な収穫を持たない、小さな果実すら見ていない。私の巡礼は、終場面に近づき、これに気づいている。

雲は低くおりている

風は薫り

私を促している

地は  
土、草、水で  
仏さまを 見せているのに

私は知った。私の巡礼にて得たものは全くなく、私の内面すらも信じる糧をも得ていないことを。そして私は理解する、私の巡礼が、最終において表現する悟りを得てはいないことを。

※ ※

分岐。私の内面は適正な選択を辿れない。仏さまは分岐の傍らにおられるが、尋ねても、ただ穏やかに静かであられる。

私よ、何故にそんなにも鈍感であろうか。神さまの表示のない分岐において、私の内面は未だに反応しないでいる。

水滴は

静かさの 深底に

溶けている

そこに

内面を

佇ませしてみる

※ ※

ああ、内面を開いて、内面の全てが外気に触れ合うように。信じることも、思うことも、告白することも、愛することも、心も、内面よりはなして

……

内面の部分を光の微風に晒し、内面の各々が伸びる、揺らぐ、蒼みを膨らませる様子を、神さまに見せよう。私の内面が、私に似合うかを、光の中

で見せよう。

私が判断するのではなく、見せることにより、その身を委ねる。私の内面は、「ただある」ことに徹する。それゆえただ思う、ただ信じる、ただ愛することもいい。

ああ、その手から私の巡礼を放された方に、ただ委ねていよう。

限られた生の表現は、私の性質を観ていただくに尽きる。巡礼は私に見えない、私の性質を表現するに尽きる。

## 憂夏<sup>ゆうか</sup> 2

添美

※ ※

はじめに。久遠の地での呼吸は、いま私の見ている生の呼吸の延長線にはなく、全く新しい呼吸である。それは神の光だけを成分として呼吸する生であり、地を養分として呼吸する生とは全く新しくする。そこでは現在の愛する、信じあう、喜び合う、間違っていない行為などは姿を見せない。それは現在と並べることも意味がない。なぜ神はこの地を巡礼とされたのか。なぜ、この地を彷徨いとされたのか。養分を吸収することで生とされたのか。

それは青い葉に潤う夏の弾みの中で、性質に光をあて、聖化を得ることを。冬に落葉した低木、枯れ草の中で最適な穏やかであることを……

※ ※

新しい地では、最適性質、最適成分に頷くことであり、これに濁りの反応を示すあらゆるものは、新しい地を選択できない。

新しい地の内外は同じ久遠で、生きると解かれるは同じ質量である。

故郷。他に久遠での安らぎを、私は理解していない。新しい地に入る前に、一時滞在する地があるかを、私は気にしていない。私の巡礼は、私の性質に適切な方向であり、神さまは、私を新しくされる。

そうして私に

夏の生を宿させて

性質の頷き

感化

そして聖化への  
変化を確認する

なぜなら、神の新しい地では、光に最適であることしかないから…。そこは最適なものだけで編まれているから…。最適な成分が内面のままで姿をもち、最適の光を浴び、最適の汗を発散する生である。

※ ※

新しい地では  
一粒の憂いも  
ないのです

添美（そえみ）

生年月日 昭和二五年七月三日 六五才

出生地 富山県下新川郡宇奈月町

※ 新幹線、黒部宇奈月温泉の町です

東京 昭和四五年四月 池貝鉄工（株）溝の口

※ この間 3社で勤務

※ 個人詩集を出版

紀元社出版

伊藤様にお世話になりました

『幸せを祈る人に』昭和四七年六月

『火葬場の歌』昭和四八年一二月

このときのネーム 唐望一美添美

帰郷 昭和五一年五月

NEC富山（株）入善町

NEC富山を定年、継続勤務

NEC富山 関連派遣会社にて勤務

現在 平成二七年一月 パート勤務